

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：32685

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25590197

研究課題名(和文)へき地に特化した心理援助システムの案出 自助・共助で自立する地域への公助導入

研究課題名(英文)Conceived of psychological support which has specialized in remote area: The introduction of public assistance to the region to independence in self-help and mutual assistance.

研究代表者

黒岩 誠 (KUROIWA, Makoto)

明星大学・人文学部・教授

研究者番号：10120263

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、外部支援が届かないため自立せざるをえなかった地域に対して、心理的援助を導入する方法について開発と検討を目的とした。成果として、へき地についてはその地理と風土の特殊性によっては既存の方法が通用しないことが検証された。その点を考慮した実証実験の結果、各支援方法について住民から概ね好意的な評価を得た。

今後の課題としては、住民の中でも世代間ではニーズに差がある、現地の行政職員や保健師を定期的・継続的サポートする方法については対象者の時間的・肉体的負担が強い、という点が挙げられた。この点については次段階での研究課題として継続検討をおこなうこととした。

研究成果の概要(英文)：This study was aimed at the development of psychological assistance method for the autonomous region without receiving public support. Since there is special region of the isolated area, it has been demonstrated that the existing methods can not be applied. As a result of conducting research in light of the above, we got relatively positive evaluation from residents. Among the residents, the demands were different, depending on the generations. In this method, aiming to support public nurse and administrative staff, we found that too much effort and burden was spent in administrative staff. These are the issues we have to examine as a next step in a continuous study in the future.

研究分野：臨床心理学、性格心理学、創造性の研究

キーワード：被災地支援 コミュニティ再生支援 戸別訪問 心理教育 へき地 限界集落 アクションリサーチ  
プログラム評価

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 一般的に、平時かつ通常の心理療法においては、一対一ないし数名対十数名程度のグループを対象として展開する。担当者と依頼者との相互との間に生じる関係性を最重要視し、さらにその相互を取り巻く社会的背景の影響を吟味し、互いで設定したゴールを目指すことになる。一方、非常時となる大規模災害時においては、その対象を「直接的被害者」のみではなく「その周辺住民」を含めた数百から数千規模の「全住民 (= コミュニティ)」と拡大すべきであると考えられ、さらに「現地行政職・現地医療保健職」を含めた介入地域すべての住人に対する公平な支援を展開する必要性が留意された。

しかし、その支援に対する科学的検証の事例は少なく、過去の経験的知見と照らしても当該地域の地域性や時代性の差があることから、同様事例としての検証は困難である。したがって、その可能性を探り、対処方策を提言することは自然災害・人災・犯罪などが発生した地域へ介入する心理臨床において非常に重要な知見となると考えている。

(2) 大規模自然災害への被災者支援は、近年の実践として 1995 年の兵庫県南部地震が中興となる。それ以前においては 1991 年の雲仙普賢岳、1993 年の北海道南西沖地震に際して被災者支援を試みられたが、知見として集約が本格化したのは兵庫県南部地震の甚大さ深刻さに端を発した、(公)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構や兵庫県こころのケアセンターの設立を期に各研究者による多くの研究と実践が展開することにより支援策が提示されたといえよう。

しかし、2011 年に発生した東日本大震災はあまりにも未曾有であり、地震・津波・冬季の悪天候が重複した非常に複雑な被害をもたらした。また、電力・燃料の不足、原子力発電に関する是非・不安などの問題が日本全国へ何らかの影響をもたらし、国民全員が何らかの形で「二次的被災者」として生活せざるをえなかった。このような事態は「想定外」と形容され、その支援方法についても一致・集約が見られないままに可能な範囲から即応的な支援が着手された。その結果、対比的に被害甚大であり広範囲の被災をし、かつ介入・報道しやすい立地のいわば「介入しやすい地域」が優先されることとなり、被害が局所的であり声を上げ難い気質のへき地は後回しとなってしまった。

(3) 本研究は、東日本大震災の被災地である岩手県下閉伊郡田野畑村を対象として、研究代表者が中心となって試行した即応的支援活動を基礎としている。当該地域は、「へき地」に相当し、やはり閉鎖的なコミュニティを形成している。事実、田野畑村は面積の 30% を被災したが、明治三陸地震の知見を活かし村内において早期から復興に取り組

み、衣食と医療面のケアを早期に完了した。しかし、地理的にへき地であっても情報ではへき地ではなくなった現代では、住民は投入される支援の格差に気づき、不平感を持たざるをえなかった。しかし、この事態への対応に対する知見は村内になく、この点からも外部支援の重要性が示唆されたが、自立・自助に頼らざるをえなかった地域性がそれを許さず、結果として精神的に不衛生な事態を継続せざるを得なかった。

## 2. 研究の目的

そこで、2011 年に発生した東日本大震災に対する被災地支援の手法について、特に支援の着手・維持が困難であると想定される「へき地」に特化したメンタルヘルスマネジメントの形式を確立することを、本研究の目的とした。具体的には、「現地で支援を担う行政職員と受容する被災者の双方向へケアをおこない、かつ全体的なバランスを保つ手法」の案出と検証とした。

「へき地」は、自立と自助を常に強制された文化があり、その気質は多くの事態で自立と自助を旨とする危険性を持っている。しかし、今回のような未曾有の事態では、それが問題からの更生・復帰を妨げる事態をまねかない。そこで、その特性を明確化し、適応する支援方式を案出することで、多くの超遠隔地域が早期から復興に進むことができると考えており、以上の点から本研究の有益性を想定している。

## 3. 研究の方法

(1) 対象地域は、岩手県下閉伊郡田野畑村で、人口 3,843 人(男性 1,868 人、女性 1,975 人)、世帯数は 1309 世帯となる(平成 22 年国勢調査、介入時の情報では約 4,300 人との情報を村から得た)。

(2) 実施方法は、現地に一定期間滞在(各年度 8 月に 1 週間程度、平成 26 年度のみ 11 月にも 1 週間追加滞在)し、実地踏査と実証研究をおこなった。検証した内容は以下の 4 項目となった。

戸別訪問プログラム... 仮設住宅を含めた、全戸への訪問を実施。検証は、半構造化面接と質問紙法による郵送調査を併用した。

コミュニティ再生プログラム... 飲食を伴うイベント形式で、対象地域において分断されたコミュニティの再生を施行した。検証は、半構造化面接・非構造化面接・質問紙法による留置法調査を組み合わせておこなった。

心理教育プログラム... 地域包括支援センターを会場とし心理教育(特にストレスマネジメント)講演を実施。検証は、質問紙法による留置法調査をおこなった。

(3) 研究の妥当性、倫理的配慮として、当該地域の地域包括支援センターと連携し、地域の選定、実施介入時期、フォローアップの

タイミングなどを検討した上でおこなった。

#### (4) 分析方法

年齢や参加動機については、回答者が少なかったため、統計的な分析を用いずに定量的な分析から傾向を見出すにとどめた。自由記述の回答は定量テキスト分析をおこない、分析にはKHCoder ver.2b30cを用いた。分析の際の形態素解析にはMeCab(ver.996)を用い、コーパス辞書はIPA辞書を用いた。

#### 4. 研究成果

今回の物理的被災地域は広範囲にわたっており、県も超えたものとなった。したがって、支援者も広範囲にわたり派遣・自薦で介入する状態が続いている。各地域での実践研究が散見しているが、統合化・総論化されるのはもうしばらく先になると考えている。本研究は、海岸段丘が発達する三陸海岸北側の地域に特化した成果としてとらえるべきではあるが、以下の点について一定の成果を得ることができたと考えている。

##### (1) 介入地域固有のコミュニティを理解する必要性

対象地域である田野畑村は、古来、コミュニティの結束によって全て対応してきた、いわば「コミュニティ依存の文化」が存在する地域であることがわかっている。したがって、支援者としてはその文化を丁寧に理解しない限り、支援・介入に望むことは難しいことが示唆された。今度の災害については、そのコミュニティを「津波という物理的な力でコミュニティが分断された」ことが問題であり、家屋の被害よりもコミュニティが被害を受けたことの方が重要であると考えべきであったことがわかった。このことにより、村のアイデンティティである「自助と共助」の力が失われたことは明白である。

また、閉鎖的な環境下でのコミュニティの特性上、前と違うコミュニティ内の力動では愚痴・不満も言えず、言っても良いのかも分からず、それまで頼り合えた人同士でさえ「不協和音」が生じ出した。そこから、支援者はコミュニティ外の存在であることが逆に望まれ、日本人よりは「外国人」を、さらには「セラピードッグ」を、というようにコミュニティ外であることが明確に分かる相手の方が傾聴相手として好まれた。これは、セラピーに際してラポールの形成を重視する従来の見解と異なるものであり、それゆえ地域差の特殊性が示唆された。

##### (2) 喪失・被災に対する新たな見解

被災について、初見では家屋・建造物・場所というような物理的な被災、もしくは人命の喪失などが挙げられた。しかし、今回の調査により「個人の収集物、記録物、風景に残る思い出」など、個々人のアイデンティティに関わる存在に対する喪失への理解が非常

に重要であることがわかった。研究対象地域の場合、地域内のコミュニティが津波により分断され、それまでの生活が失われた。これを第一の断絶とすると、個人の所有物・記録物・思い出を喪失したことは第二の断絶となる。つまり、被災者は物理的な地盤を喪失し、精神的な拠り所や存在意義をも喪失している。そしてそれらの断絶を抱えた中で復興に臨んでいることとなる。この状況を丁寧に支援することは支援方法の中心的な軸になるのではないかと考えている。

また、被災の有無であるが、北三陸の海岸段丘では強固な地盤により地震被害はなく、津波被害のみという状況であった。そのため、津波被害のない崖の上の居住者は、物理的被災がないまま生活することとなり、結果として物資の支援は「遠慮」することとなった。この可視的被害のない方々が抱える「支援を受けて良いのか」という葛藤は非常に大きく、場合によっては「日常生活を続ける」ことすら禁忌であるような錯覚を持った住民も存在した。このように「可視的な被害」がないことで生じる心理的負担感への注目が重要であることが判明したことは、重要な知見を得たといえよう。

以上、喪失・被災の有無のみで「被災者」を考えることはできず、個々人の価値観に寄り添うべきであることが示唆された。

##### (3) 戸別訪問プログラムへの評価・効果

地域的・季節的に珍しい存在である「バラの花」一輪を持参し、それを媒介にして訪問し傾聴をおこなうプログラムであったが、50歳代以降(80%)からは肯定的な意見が、20~30歳代(16%)からは肯定的な意見とともに否定的な意見も寄せられた。このことは、「子育て層」と「壮年・高齢層」との間に支援方法・支援内容に対するニーズの差が表れていることを示唆した。この成果により、被災地域における支援について「時期(被災当日からの経過日数)・対象の層(ライフサイクルに合わせた対象種別)」を考慮したプログラムが必要であることが示唆された。

ただし、その地域内でおこなわれたプログラムへの参加動機は、すべて戸別訪問プログラムにおいて支援者と住民が顔を合わせたこと、リーフレットが置かれたことに由来している。このことから、戸別訪問という手法には誤りはなく、むしろ必要であり、支援者が足を運ぶことにへき地での支援の鍵があると検証された。

##### (4) コミュニティ再生プログラムへの評価・効果

子育て層(20~30歳代)・50歳代は広報や知人の誘い、地域包括支援センターからの声掛けにより参加動機が形成されたが、60歳代は戸別訪問プログラムでの対面が契機となっている。

平成25年は、支援者が設定した「非日常

的(=祭りの代用)な食事会を介し、分断されたコミュニティを再生する顔合わせの場を提供した。平成26年度については、支援者が設定した「メンタルヘルスに特化した」健康サポートの会を介し、同様の場を提供した。その結果、再会の場としてのみならず、支援絵の要望・乾燥の聴取や住民の想いを深く聴取する場となり、インタビュー調査として一定の成果を得た。また、参加者の満足度も高いことがわかっている。

しかし、このコミュニティ再生プログラムについては、未だその手法(=イベントとして住民にどう伝え、どのようなイベント形態として設定するか)について一定の見解を得ておらず、満足度・成果をあげる形態については決定できていない。形態の確定は今後の研究課題とした。

#### (5) 心理教育プログラムへの評価・効果

参加動機には、物理的な移動手段が大きく影響しており、自車・他車問わず会場までの移動が可能な住民のみの参加となった。これは今後の大きな検討点となった。

内容は震災後の精神状態を解説し各々に理解をうながす「災害・事件・事故後のストレス」、全般的なメンタルヘルスを狙いとした「自殺防止」、一般的に理解が浅いストレスについて改めて定義づけした「ストレスとは」等を座学で講義した。また、最後にリラクゼーショントレーニングを導入することで、講演内容を事後の自己管理につなげる工夫を加え、メンタルヘルスの理解と自己の精神衛生を向上させるよう努めた。

以上のプログラムは、心理学的知見を持たなかった住民に対して、具体的な知見・手法の提供になるのと同時に、心理的支援を受容する風土を醸成することが可能となった。そこから、このプログラムについてすべての参加者が肯定的に評価していた。

(6) 本研究の成果として、田村ほか(2012)は以下のパラドックスを指摘した。住民に「田野畑村の良いところ」を書いてもらった際、その中に「みんな親戚、みんな友達」と書かれたものがあつた。古来、この地域は自助・共助の強い絆で形成されてきたが、この言葉には被災後にわかにかえった「絆」とは明確にちがう何かがあるように感じられた。

この凝集性の高さは力であり同時に弊害でもあつた。このパラドックスはこれまで絶妙なバランスで維持されてきたが、東日本大震災という未曾有の事態を機に軋み崩れかけていることがわかっている。コミュニティの分断により関係性は変化し、より小さくしかし強固な同族のつながりが生み出された。強固すぎるつながりは、その他のものが入り込む隙間を許さない。支援者はこうした背景を前提に、いかにして支援の手を差し込むか、地域に即した効果的な支援とは何かを考え

る必要があることが示唆された。

#### (7) 終わりに

本研究に臨むまでに、即応的支援段階(平成23年度)・計画的支援段階(平成24年度)の2年間を経ている。その2年で痛感したことは、既存の理論・実践方法の限界であつた。理論は与えられた条件下では常に解答を持ちうるはずであり、そこから我々支援者はどの被災地を訪ねても適切な対処法を展開できるはずであつた。しかし、今回の事態においての正答はなく、結果として研究代表者が臨床上で試行錯誤の中から生み出した知見を適用するに至った次第であつた。本研究は、その方法を科学的に検証し、他の地域・他の災害にも適応しうるかを検討し、汎用性のあるメソッドを開発することが目的であつた。

しかし、現時点ではその検証は十分ではない。マンパワー不足、支援者の本務との兼ね合い、大きなチームを運勢する上でのシステム化など、課題は山積した。その上でこの研究の意味を考えた際、意義はあつたと考えている。特に、介入した地域の特殊性に対する理解と、バラ輪を媒介し戸別訪問する方法・コミュニティ再生という現在の研究方向性が誤解ではないことが示唆されたことは重要な成果と考えている。

本研究は継続研究と位置づけられる。平成27年度~平成29年度において、本研究を基礎とした研究をおこなう予定である。次段階では、本研究を昇華させつつ、「現地支援者への情緒的・道具的サポート」「外部支援者のメンタルヘルス」「支援チームの恒久的設置と安定運営」についてについて検討を予定している。

最後に、研究実施にあたり、本研究を支えてくださった多くの研究協力者の方々、明星大学関係者、同大学連携研究センターの皆様、田野畑村地域包括支援センター、田野畑村役場、そして田野畑村の方々に深く感謝いたします。

#### <引用文献>

田村友一、高下梓、平田茜、特集「東日本大震災と精神衛生」 田野畑のいまとこれから、こころの健康、査読無、Vol.27、No.2、2012、16-20、

中村有、木村淳子、黒岩誠、特集「東日本大震災と精神衛生」「いま、ここで」、田野畑村が必要とする包括的支援 - チーム「バラ作戦」の試み -、こころの健康、査読無、Vol.27、No.2、2012、21-25、喜多祐荘、黒岩誠、廣池利邦、岩崎弥生、久保朋子、ランチオンセミナー 田野畑村におけるお手伝い、こころの健康、査読無、Vol.27、No.1、2012、41-52、

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計3件)

大橋智、田村友一、中村有、高下梓、黒岩誠、コミュニティの再建をめざした心理的支援田野畑村におけるチーム「バラ作戦」の経過報告被災地支援におけるアクション・リサーチのプログラム評価をめざして、明星大学心理学年報、査読無、Vol.32、2014、39-46、

黒岩誠、講演録東日本大震災被災支援と心理学 心のケアのこれから 田野畑村の「いま、ここで」、明星大学心理学年報、査読無、Vol.32、2014、51-54、

黒岩誠、シンポジウム南相馬をともにあゆむ 田野畑村の今ここで、こころの健康、査読無、Vol.28、No.1、2013、39-40、

### 〔学会発表〕(計0件)

### 〔図書〕(計0件)

### 〔産業財産権〕

#### 出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

#### 取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

### 〔その他〕

ホームページ等  
なし

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

黒岩 誠 (KUROIWA, Makoto)  
明星大学・人文学部・教授  
研究者番号：10120263

### (2)研究分担者

なし

### (3)連携研究者

なし

## (4)研究協力者

具来夢 庵努龍 (Andrew, Grimes)

日高 陽子 (HIDAKA, Yoko)

平田 茜 (HIRATA, Akane)

樫木 啓二 (KASHINOKI, Keiji)

古山 健一 (KOYAMA, Kenichi)

木村 淳子 (KIMURA, Junko)

蓑地 真理子 (MINOJI, Mariko)

永井 尚志 (NAGAI, Takashi)

中島 清貴 (NAKAJIMA, Kiyotaka)

中村 有 (NAKAMURA, Yu)

斜木 しおり (NANAMEKI, Shiori)

大橋 智 (OHASHI, Tomo)

佐々木 敏夫 (SASAKI, Toshio)

佐々木 裕佳 (SASAKI, Yuka)

高下 梓 (TAKASHITA, Azusa)

田村 友一 (TAMURA, Yuichi)

渡邊 雄太 (WATANABE, Yuta)